

処方番号：157

処方名：当帰貝母苦参丸料（とうきばいもくじんがんにょう）

処方構成：

当帰 3、貝母 3、苦参 3

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以下から虚弱なものの次の諸症

効能・効果：

小便がしぶって出にくいもの、排尿困難

原典：金匱要略

出典：

解説：

『金匱要略』には「妊娠、小便難、飲食如故」とある。

157.当婦貝母苦参丸料

参考文献名	当 婦	貝 母	苦 参
処方分量集	3	3	3
診療の実際	3	3	3
診療医典	3	3	3
症候別治療	-	-	-
処方解説	-	-	-
後世要方解説	-	-	-
漢方百話	-	-	-
応用の実際	-	-	-
明解処方	-	-	-

処方番号：158

処方名：独活寄生湯（どっかつきせいとう）

処方構成：

芍薬 2、当帰 2、防風 2、人参 2、茯苓 2、杜仲 2、細辛 2、桂枝 2、地黄 2、牛膝 2、秦艽 2、川芎 2、桑寄生 2、甘草 2、独活 3-4、（大棗 2、生姜 1 を加えてもよい）

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度以下から虚弱で、疲れやすく慢性に経過し、ときにむくみがあるものの次の諸症

効能・効果：

神経痛、関節痛、腰痛、関節リウマチ

原典：太平惠民和剂局方

出典：千金要方

解説：

四君子湯（人参、朮、茯苓、甘草）から朮を去り、四物湯（当帰、川芎、芍薬、地黄）と、鎮痛作用のある独活、秦艽、防風、細辛、筋肉や骨を増強する杜仲、牛膝、寄生、痛みや浮腫みをとる秦艽、独活、細辛、茯苓、温める桂枝、細辛、防風から成っている。消化器を強くして、食欲をつける四君子湯に、造血や血行を改善する四物湯が、基礎体力を改善し、筋肉や骨（関節）を強くしてゆくのが本方の目的である。古来よりリュウマチは風にあたり、寒さにあたり、湿気が多い環境や体内の湿気が多いと悪化する病氣とされてきており、本方はまさにその対策の薬とすることができる。特に体力の無くなった人の腰痛に使ってみると良い。

『和剂局方』の薬方には、当時の台所に常に有った大棗と生姜を煎じる時に追加することが多く、四君子湯も生姜と大棗を入れるのが普通になっていた。そこで本方にも大棗と生姜が入るものがある。

処方中の「寄生」は『神農本草経』に書かれている「桑寄生」（ヤドリギ科のヤドリギ）のことで、公的な規格には収載されていない。サルノコシカケ科の商品名「寄生」と混同されがちなので注意が必要である。

158.独活寄生湯

参考文献名	芍薬	当归	防风	人参	茯苓	杜仲	細辛	桂枝	熟地黄	地黄	牛膝	秦艽	川芎	寄生	甘草	独活	大棗	乾姜	乾生薑	用法・用量
経験・漢方処方分量集	2	2	2	2	2	2	2	2		2	2	2	2	2	2	3				
改訂新版漢方処方分量集 注1	2	2	2	2	2	2	2	2	2		2	2	2	2	2	4	2	1		
実用漢方処方集(龍) 注2	2	2	2	2	2	2	2	2	2		2	2	2	2	2	4	2		1	
黙堂柴田良治処方集 注3	2	2	2	2	2	2	2	2		2	2	2	2	2	2	5			1	

注1
神経痛、リウマチ等で腰背或は膝脚の痛或は麻痺するもの

注2
目標・応用: 神経痛、リウマチなどで腰背あるいは膝脚の痛あるいは麻痺するもの

注3
リウマチ様関節炎、坐骨神経痛、腰痛、歩行困難、冷痺

処方番号：159

処方名：独活湯（どっかつとう）

処方構成：

独活 2、羌活 2、防風 2、桂枝 2、大黃 2、沢瀉 2、当帰 3、桃仁 3、連翹 3、防已 5、黄柏 5、甘草 1.5

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度なものの次の諸症

効能・効果：

腰痛、手足の屈伸痛

原典：蘭室秘蔵

出典：

解説：

独活・羌活・防風・沢瀉・防已は風湿を駆逐し痛みを去る。桂皮・当帰・桃仁は血の流れを良くし温める。大黃・黄柏は炎症（熱）をとる。原典には「労役腰痛折るがごとく沈重山の如し」と記されている。過労のため、外気の湿氣にあい、血行が悪くなって足腰の屈伸が痛いときに使われる。

159.独活湯

	独活	羌活	防風	桂枝	桂皮	大黃	沢瀉	当帰	桃仁	連翹	防已	黄柏	甘草
参考文献名													
処方分量集	記載なし												
診療医典	2	2	2	2		2	2	3	3	3	5	5	1.5
和漢薬考処方1 注1	3銭	-	1銭半	-		-	-	1銭半	-	-	-	-	1銭半
和漢薬考処方2 注2	5銭	5銭	5銭	5銭		-	-	5銭	-	-	-	-	2銭半
漢方あれこれ	記載なし												
後世要方解説	記載なし												
漢方194方の使い方	2	2	2	-	2	2	2	3	3	3	5	5	1.5

	茯苓	人参	芍薬	黄耆	葛根	乾姜	附子	黑豆	細辛	白微	半夏	遠志	菖蒲
参考文献名													
処方分量集													
診療医典	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
和漢薬考処方1 注1	1銭半	1銭半	1銭半	1銭半	1銭半	1銭半	1銭	1合	-	-	-	-	-
和漢薬考処方2 注2	5銭	5銭	-	-	-	-	-	-	5銭	5銭	5銭	5銭	5銭
漢方あれこれ													
後世要方解説													
漢方194方の使い方	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

[注1] 脚気，冷えによる屈伸痛，湯剂温服

[注2] 風虚，昏憶覚不為寒熱治す，湯剂温服

処方番号：160

処方名：二朮湯（にじゅつとう）

処方構成：

白朮 1.5-2.5、茯苓 1.5-2.5、陳皮 1.5-2.5、天南星 1.5-2.5、香附子 1.5-2.5、黄芩 1.5-2.5、
威靈仙 1.5-2.5、羌活 1.5-2.5、半夏 2-4、蒼朮 1.5-3、甘草 1-1.5、生姜 0.6-1

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度で、肩や上腕などに痛みがあるものの次の諸症

効能・効果：

四十肩、五十肩

原典：万病回春

出典：

解説：

朱丹溪の創方とされている、五十肩の薬方でもある。用法は虚状を帯びた、水証の方剂であり、頸腕症候群に用いるが、症状は水毒性の体質で筋肉にしまりがなく、胃腸のあまり強くない人で、腕や肩の痛む者に用う。

『香月牛山選集』に「肩臂痛は多是痰に属する也、二朮湯を用べし、或は二陳湯に蒼朮木瓜薏苡仁枳実釣藤鉤を加えて用べし、奇々妙々」とある。

160.二朮湯

参考文献名	白朮	茯苓	陳皮	天南星	香附子	黄芩	威靈仙	羌活	半夏	蒼朮	甘草	乾生姜
処方分量集	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	2	1.5	1.5	0.6
診療医典 注1	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	4	3	1	1
処方解説	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	4	3	1	1
実用漢方療法 注2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	1.5	1
診療と治療 注3	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	2	1.5	1.5	1

【注1】 水毒性の体質で、筋肉の緊張に乏しく脈も弱く胃腸が大丈夫でないものの頸腕症候群に用いる。古今方彙をみると臂痛のところに「痰飲にて雙臂の痛者及び手臂の痛む者を治す」とある。

【注2】 神経痛の治療………太りぎみで、からだのがっちりした人によく応ずる。適応範囲は割と狭いがうまく目標に当たれば、ほんとうによく効くクスリである。

【注3】 五十肩にいろいろな処方を用いて効果のない場合に、本方で著効を奏することがある。

処方番号：161

処方名：二陳湯（にちんとう）

処方構成：

半夏 5-7、茯苓 3.5-5、陳皮 3.5-4、生姜 1（ヒネショウガを使用する場合 2-3）、甘草 1-2

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度で、悪心、嘔吐があるものの次の諸症

効能・効果：

悪心、嘔吐、胃部不快感、慢性胃炎、二日酔い

原典：太平惠民和劑局方

出典：

解説：

『衆方規矩』痰症門に「一切の痰飲化して百病となるを治す。」と記載されている。痰飲すなわち水毒を治す代表的な処方である。漢方の教えに「怪病は痰を治せ」と云う言葉があるが、痰飲は色々な疾患の原因となっていることが多い。「脾胃は生痰の源」と言われているが、脾胃虚証、あるいは過食などで食物を十分消化できないときに未消化の飲食物から痰(余分な水)が生じてくると考えられている。この水分が気管支のほうに影響すれば喀痰をふやすことになる。この水分代謝の異常(痰)が原因して病気を発すると頭痛、めまい、肩凝り、咳嗽、喀痰、脳血管障害、心筋障害、神経痛、関節痛、浮腫、身重感、悪心、嘔吐、食欲不振その他色々の疾患や症状を来すことが知られている。本方は脾胃が虚弱で痰を生じている色々な疾患の基本処方として用いられる。胃腸の機能を良くして痰を消す化痰の剤の代表である。

161.二陳湯

参考文献名		半夏	茯苓	陳皮	生姜	甘草
診療医典	注1	5	5	4	3	1
処方解説	注2	5	5	4	3	1
治療の実際					干生姜1	
応用の実際	注3	5	5	4	3	1
要方解説	注4	5	5	4	1.5	1
処方集	注5	7	3.5	3.5	2	2
処方分量集		5	5	4	乾姜1	1

〔注1〕 本方は、胃内停水によって悪心、嘔吐を發するものに用い、その他痰飲（水毒）による諸病に広く応用される。すなわち心下の水氣、胃内に停水があつて熱を生じ、その水が動いて悪心、嘔吐、あるいは眩暈、心動悸、心下部不快などを訴えるものである。本方は後世方の基本の一つで、本方を基として痰飲を治す処方が多く作られている。

本方は、小半夏加茯苓湯に陳皮と甘草を加えたもので、半夏は君薬で湿を燥かし、痰を利し、茯苓は佐薬で水をめぐらし、陳皮は臣薬で氣を順らし痰を下す。甘草は使薬で脾胃を補うものである。以上の目標をもって、本方は主として嘔吐、悪心、眩暈、頭痛、悪阻、氣うつ、食傷、二日酔、脳溢血などに広く応用される。

〔注2〕 嘔吐に用いるときは冷服するがよい。この方に用いる陳皮と半夏は陳久なるを尊ぶということより二陳湯という。心下の水氣、胃内停水によって、熱を生じ、嘔吐・悪心、あるいは眩暈・心動悸・心下部不快等を訴えるものである。この方は単独にて用いることは少なく、本方を加味し、あるいは本方を基本として痰飲を治す処方が多く組み立てられている。痰の色青く光あるは風痰、清冷なるは寒痰、白色なるは濕痰、黄色なるは熱痰とされている。大体痰は湿によって生ずるので、二陳湯が基本となり、湿を乾かすのである。

なお、胃内停水によって嘔吐・悪心を發するものに用いる。その他痰飲による諸病に應用される。本方は主として嘔吐・悪心・眩暈・頭痛・悪阻・氣うつ・食傷・二日酔・脳溢血等に用いられ、またそれぞれの処方に加味される。

〔注3〕 胃内停水による悪心、嘔吐および水飲（水毒）による諸症に用いる。心下部に水振音をみとめ、悪心、嘔吐、めまい（眩暈）、心悸亢進、胃部不快感などを訴えるものである。水飲による症状は千差万別であるが、片頭痛、胸痛、心下痛、脇下痛、下肢腫痛、喘咳、咳嗽、全身倦怠などが多い。

なお、胃下垂症、常習頭痛、ノイローゼ、食中毒、二日酔い、脳溢血などにも應用される。

〔注4〕 痰飲患をなし、あるいは嘔吐、あるいは頭眩心悸、あるいは中脘快からず、あるいは發して寒熱をなし、あるいは生冷を食するに因つて脾胃和せざるを治す。この方は痰飲を治する聖劑にして、諸の痰を治する薬方皆この方に加減したるもの多し。一切の痰飲化して百病となるを治する妙劑なり。（牛山方考）

本方に用いる陳皮、半夏二味は共に陳久なるを貴ぶといわれ、よつて二陳湯と名づけた。足の太陰（脾經）陽明（胃經）の薬である。諸痰飲を治する總司の劑で、水飲胃に入り、脾胃弱くして中焦の氣めぐらず痰となる。稀なれば飲、稠なれば痰と言う、と。この方の司るものは胃内停水により、嘔吐、悪心、眩暈、心悸亢進、胃部不快感等を現わし、または不定期熱を發し、その他原因不明の怪症を惹起するものを治す。脈は多くは沈弦細である。

なお、嘔吐、悪心、眩暈、頭痛、悪阻には砂仁、黄芩、連翹各1.5を加えて應用される。

〔注5〕 一切の痰飲、あるいは悪心嘔吐、あるいは頭眩心悸亢進、あるいは胃部のつかえ、消化不良に用いられる。なお、胃病、眩暈、頭痛、咳痰にも應用される。

処方番号：161A

処方名：枳縮二陳湯（きしゅくにちんとう）

処方構成：

枳実 1-3、縮砂 1-3、半夏 2-3、陳皮 2、香附子 2-3、木香 1-2、草豆蔻 1-2、乾姜 1-2、厚朴 1.5-2.5、茴香 1、延胡索 1.5-2.5、甘草 1、生姜 1（ヒネシヨウガを使用する場合 3）、茯苓 3

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以下で、胃腸が弱いものの次の諸症

効能・効果：

胃痛、胸痛、肋間神経痛

原典：万病回春

出典：勿誤藥室方函口訣

解説：

二陳湯を基本骨格とし、枳実、縮砂など気の巡りを良くし、痛みを緩める生薬を加えた方剤である。原典である『万病回春』には「涎、心膈に在り、上り攻め、腰背に走り、嘔噦して大いに痛むを治す」（心痛門）、「関格して、上下通ぜざるを治す」（関格門）と記されている。すなわち、水毒が胸郭内にあつて気の流通が阻害され、このために胸痛や腰背部の痛み、嘔吐などを起こす病態を治す方剤である。

『漢方治療症例選集』（緒方玄芳）には本方が奏功した「胃酸過多症状を伴う肩こり」の症例、「10年来の胃の重苦しく張る」症例、「長年くりかえす心下部鈍痛」の症例が記されており、臨床上参考となる記述である。

161A.枳縮二陳湯

参考文献名	枳 実	縮 砂	半 夏	陳 皮	香 附 子	木 香	草 豆 冠	草 豆	乾 姜	厚 朴	茴 香	玄 胡 索	延 胡 索	甘 草
漢方診療医典	1.5	1.5	3	2	2	1	1	1	2	1		2	1	
漢方処方応用の実際 注1	1.5	1.5	3	2	2	1	1	1	2	1		2	1	
臨床応用漢方処方解説 注2	1	1	3	2	2	1	1		2	1		2		
金匱要略入門	1匁	1匁	1匁	1匁	1匁	5分	5分	5分	8分	8分	8分		3分	
症候による漢方治療の実際 注3	2	2	2	2	2	1	1	1	1.5	1.5		1.5	1	
漢方後世要方解説 注4	1	1.5	3	2	2	1	1	1	2	1		2	1	
経験処方分量集	1.5	1.5	3	2	2	1	1		2	1		2	1	
改訂新版漢方処方分量集 注5	3	3	3	3	3	2	2	2	2.5	2.5		2.5	1	
1000万人の漢方診断と治療の実際 注6	1.5	1.5	3	2	2	1	1		2	1		2	1	

参考文献名	生 姜	乾 生 姜	竹 瀝	茯 苓	磨 石	用法・用量
漢方診療医典	1.5			3		
漢方処方応用の実際 注1	1.5			3		
臨床応用漢方処方解説 注2		1		3		
金匱要略入門	3片		○		○	
症候による漢方治療の実際 注3	3			2		*1
漢方後世要方解説 注4	1			3		
経験処方分量集		1		3		
改訂新版漢方処方分量集 注5						
1000万人の漢方診断と治療の実際 注6	1			3		

*1 竹瀝2のかわりに茯苓2

注1

本方は嘔吐がひどく、胸部から腹部にかけて激しく痛み、その痛みが背部から腰部に放散し、百方効なきもの(梧竹楼方函訣)胃炎、胃アトニー症、胃酸過多症、胃潰瘍、肋間神経痛

注2

胸中胃内の痰飲が心下両乳間を攻めて痛み、嘔吐して腰背に及ぶものを治す。疝と痰飲を兼ね、胃痛、狭心症、神経性心臓痛、留飲症などに応用される。

注3

嘔吐がひどくて、胸から腹へかけて痛み、また背に連り腰へかけて痛みが甚しく種々の処方を用いても効のない者に与えて奇効がある。すべて、みずおちの痛みがひどくて嘔吐するものには、先ずこの方を用いてみる。目当は疼痛が腰、背に連るというところにある。

注4

- ・慢性胃炎を患う者、種々の誘因によって胸中の痰、胃内停水が毒性を帯びて心下を攻めて、痛み烈しく、胃痙攣の如く、心臓部、両乳間に攻め上がって狭心症の如く、心臓神経痛の如く、同時に嘔吐乾嘔あってその痛み腰背に遊走する症を治す。総べて胸元に痛み甚だしく嘔嘖あるものに用いられる。疝に痰飲を兼ねたものである。
- ・胃痛、胃痙攣、嘔吐、腰背痛を伴なうもの、狭心症、心臓神経症、溜飲症
- ・胃痛、胃痙攣一嘔吐、腰背痛あるものに用いる。
- ・狭心症様疾患一痰飲による胸内苦悶に用いられることが多い。
- ・心臓神経痛一胸膈停飲によって、心臓神経痛、肋間神経痛などと称せらるるものの一症
- ・所謂留飲一陳旧の胃内低水、慢性胃炎に本方がよいことがある。
- ・大小便秘閉一腹満しても湯水も納まらないものにこの症がある。

注5

痰飲性の腰背痛、吃逆、嘔吐
胃痛、慢性胃炎、背痛、肋間神経痛、胸痛、腰痛、狭心症、心臓ノイローゼ、留飲症

注6
心臟神經症

処方番号：162

処方名：女神湯（安栄湯）（によしんとう／あんえいとう）

処方構成：

当帰 3-4、川芎 3、白朮 3（蒼朮も可）、香附子 3-4、桂枝 2-3、黄芩 2-4、人參 1.5-2、檳榔子 2-4、
黄連 1-2、木香 1-2、丁子 0.5-1、甘草 1-1.5、大黃 0.5-1（大黃はなくても可）

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以上で、のぼせとめまいのあるものの次の諸症

効能・効果：

産前産後の神経症、月経不順、血の道症、更年期障害、神経症

原典：勿誤薬室方函

出典：

解説：

本方のはのぼせとめまい(上衝と眩暈)に血証を伴った症状に適応するので、婦人の産前産後の神経症、月経異常、腰痛、血の道症や更年期の精神安定剤の役目を果たし、動悸、めまい、精神不安、頭痛、頭重など自律神経失調症候群に広く用いられるが、気を順らし血熱を冷ますので、安栄湯とも名付け、陣中の神経症を治すものとされていた。大便結せず通じのあるものには、大黃を去って使用する。体質にも特徴が少なく、瘀血症もはっきりしないが、脈証、腹証ともに虚していない体力中ぐらいのものに適応する。

162.女神湯

参考文献名		当帰	川芎	白朮	朮	香附子	桂枝	黄芩	人参	檳榔子	黄連	木香	丁子	甘草	大黃*
診療医典	注1	3	3		3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	0.5	1.5	0.5
処方解説	注2	3	3		3	3	2	2	2	2	1	1	1	1	0.5~1
後世要方解説	注3	3	3		3	2	2	2	2	2	1.5	1.5	1	1.5	0.5~1
応用の実際	注4	3	3		3	3	3	3	1.5	3	2	2	0.5	1.5	1
漢方医学	注5	3	3		3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	0.5	1.5	0.5
治療の実際		3	3		3	3	3	2	2	3	1.5	1.5	0.5	1.5	1
漢方療法		4	3		3	4	3	4	1.5	4	2	2	0.5	1.5	1
漢方精撰百八方		3	3	3		3	3	3	1.5	3	2	2	0.5	1.5	1

* 通じのある人は大黃を去る

【注1】 本方は気をめぐらし、気を降し、うつを散じ、血熱をさますというもので、更年期における精神安定剤の役目を果すものである。上衝と眩暈を目標とし、更年期障害や血の道症で虚実半ばし、また産前産後に起った自律神経失調症状群の中で、のぼせとめまいを主訴とするものに用いる。

【注2】 上衝と眩暈とを目標とする。更年期血の道症で虚実半ばし、血熱のあるものによい。また産前産後に起った自律神経失調症候群でのぼせとめまいを主訴とするものによい。脈も腹もそれほど虚していない。

【注3】 勿誤方函に「血症、上衝眩暈するを治す。産前産後通治の劑なり。」気をめぐらし、血熱を涼ます剤で、別に安栄湯と名づけ、陣中の神経症を治するものとしていた。

【注4】 体質的にはあまり特徴がなく、体力中ぐらいかやや強い人。瘀血の特徴もはっきりしないが、たいていは月経に異状がある。産後流産のあと人工流産後などによくおこる神経症状である。症状はたいてい慢性、頑固で、長い間不眠、頭痛、頭重感、めまい、動悸(心悸亢進)、のぼせ(上逆感)、腰痛などになやまされ、精神不安があり、気分が憂うつである。

【注5】 のぼせ、動悸、めまい、背部が火が燃えるようにカッと熱くなり汗が流れ、便秘すると云うようなものによい。血の道症、更年期障害に応用。

処方番号：163

処方名：人參湯（理中丸）（にんじんとう／りちゅうがん）

処方構成：

人參 3、甘草 3、白朮 3（蒼朮も可）、乾姜 2-3

用法・用量：

（1）散：1回 2-3g 1日 3回

（2）湯

しばり：

体力虚弱で、疲れやすくて手足などが冷えやすいものの次の諸症

効能・効果：

胃腸虚弱、下痢、嘔吐、胃痛、腹痛、急・慢性胃炎

原典：傷寒論、金匱要略

出典：

解説：

人參湯は漢方の基幹処方の一つであり、その応用は広い（香砂六君子湯の解説参照）。『傷寒論』（霍乱病篇）に「霍乱で頭痛発熱し、からだ痛み熱が多くて水を飲みたがるものは五苓散の主治である。寒が多くて水を飲みたがらないものは理中丸の主治である」と述べている。また同（差後労役病篇）、「大病が差えてなお、頻繁に唾を吐くことが長く続くようなものには理中丸が宜し」とある。

さらに『金匱要略』（胸痺病門）に、「胸がしめつけられみぞおちに気が痞え、気が固まって胸にあるため胸がつまり、それが脇の下へ下り、それから上がってみぞおちへつきあたってくる。（中略）これは人參湯もまたこれを主る」とある。

以上、古典によれば人參湯の原初的な使用法は(1)冷えからくる急性の吐瀉病、(2)病後の疲れからくる生つば(3)胸がつまるように痛む症状を治すに用いた薬方であった。しかし、わが国の漢方は次のようにその適応範囲を拡張している。

なお、本方を用いると3-4日にして浮腫のあらわれることがある。これは薬が病気に的中した吉徴であるから、服薬を続けていると自然に消失するのが常である。浮腫が気になるものには五苓散を用いるとよいという。

163.人参湯

参考文献名	人参	甘草	朮	乾姜	用法・用量
診療医典 注1	3	3	3	3	
治療の実際 注2	3	3	3	3	
処方解説 注3	3	3	3	2~3	
応用の実際 注4	3	3	3	3	
基礎と診療 注5	3	3	3	3	
処方分量集	3	3	3	2~3	
漢方処方集	3	3	3	3	
漢方処方 注6	3	3	3	3	

【注1】 冷え症で血色がすぐれない。胃腸が弱く、下痢しやすく、腹が痛んだり、吐きけがあったり、口に薄いつばがたまったり、小便が近くて多く出るものなどで、一般に元気のないものの次の諸症：胃下垂症、胃アトニー症、胃炎、胃潰瘍、小児の自家中毒症、悪阻(つわり)、肋間神経痛、急性吐瀉病、弛緩性出血。

【注2】 傷寒論の理中丸の「理中」とは、中焦、すなわち胃腸の機能の衰弱を治す効果があるという意味である。本方は胃の機能をたかめ、胃のもたれを去り、血行をよくして新陳代謝を盛んにする。

食が細く食べてもすぐ満腹して食べられないような食欲不振、消化器の障害からくる胸痛、また消化器に障害があって冷えるもの、冷え症のもの、尿が薄くて近く多量に出るもの、舞蹈病などに用いる。

【注3】 胸痛、右上腹部痛、自家中毒症、唾液分泌過多症、胃痙攣。

【注4】 生つば、夜尿症。

【注5】 胃拡張、胃酸過多症、減酸症、蛔虫、急性慢性胃カタル、胃腸性神経衰弱、肺結核、肋間神経痛、萎縮腎。

【注6】 陰症の急性吐瀉病、四肢神経痛。

処方番号：163A

処方名：桂枝人参湯（けいしにんじんとう）

処方構成：

桂枝 4、甘草 3、人参 3、乾姜 2、白朮 3（蒼朮も可）

用法・用量：

湯

しぼり：

体力虚弱で胃腸が弱く、ときに発熱・悪寒を伴うものの次の諸症

効能・効果：

頭痛、動悸、慢性胃腸炎、胃腸虚弱、下痢、消化器症状を伴う感冒

原典：傷寒論

出典：

解説：

本方は理中丸（人参湯）に桂枝を加えたものである。理中丸は嘔吐下痢があつて、その上頭痛、発熱、身疼痛などの症状があり、しかも裏に寒があつて水を欲しないようなものに用いる。桂枝は表証の虚、すなわち、汗が自然に出て脈が浮弱なようなものを解すに用いる。

『傷寒論』に本剤の調製法として、まず甘草、白朮、人参、乾姜の4味を水9升到煮て5升を取り、これに桂枝をいれてさらに煮て3升を取り、滓を去り、1升を温服すべきものとしている。

163A.桂枝人参湯

参考文献名		桂枝	甘草	朮	白朮	人参	乾姜
診療医典	注1	4	3	3	-	3	2
治療の実際		4	3	3	-	3	2
処方解説	注2	4	3	-	3	3	2
応用の実際	注3	4	3	3	-	3	2
処方分量集		4	3	3	-	3	2
漢方処方集		4	4	-	3	3	3
漢方処方		4	3	3	-	3	2

【注1】 からだの表面は熱して熱があるのに、胃腸は冷えて機能が衰え、吐いたり下痢したりするようなものに用いる。急性胃腸炎、胃腸の弱い人にくる頭痛や動悸、息切れ。神経性心悸亢進、心臓病、常習性頭痛。

【注2】 頭痛、発熱、汗が出る、悪寒などの表熱の症状があって、みぞおちが硬く、下痢のあるもの。冷え症で下痢しやすく虚証の人に用いる。

【注3】 頭痛、発熱、発汗の傾向があり、また四肢倦怠、みぞおちが痞え、水瀉性下痢のはなはだしいものに用いる。感冒性下痢症、かぜ薬による胃腸障害、胃カタル。

処方番号：163B 処方名：附子理中湯（ぶしりちゅうとう）

処方構成：

人参 3、加エブシ 0.5-1、乾姜 2-3、甘草 2-3、白朮 3（蒼朮も可）

用法・用量：

湯

しばり：

体力虚弱で、手足の冷えが強く、疲れやすいものの次の諸症

効能・効果：

胃腸虚弱、下痢、嘔吐、胃痛、腹痛、急・慢性胃炎

原典：太平惠民和劑局方

出典：

解説：

人参湯に附子を加えたものを附子理中湯という。人参湯証で手足の冷え甚だしく、悪寒し、脈微弱のものに用いる。